SPECIAL REPORT

食農審畜産部会、新たな酪肉近と改良増殖目標を答申

農水省は7月8日、東京で食料・農業・農村政策審議会畜産部会（部会長・鈴木宣弘東京大大学院教授）を開き、農林水産大臣に対し、平成32年度を目標とする新たな酪肉近代化基本方針と家畜改良増殖目標を答申した。

畜産・酪農所得補償の検討と6次産業化、多様な経営育成盛る

新たな酪肉近代化基本方針（新酪肉近）の特徴としては、民主党農政の目玉政策である畜産・酪農所得補償制度の導入の検討と、６次産業化の推進などで多様な経営の育成確保に転換することが盛り込まれた。

ただ、畜産・酪農所得補償制度の導入については、当初案で「導入する」との表現が、最終的には「現行の経営安定対策の機能などを検証し、その在り方や導入時期を検討。その際、生産現場の意見を十分に聞く」と慎重な表現に修正された。

また、多様な経営を育成確保するため、経営規模拡大だけでなく、地域の特性を活かした、生産から加工、販売までの総合的な取り組みである６次産業化の考えを盛り込んだ。

さらに、従来の酪肉近にはなかった加工食品の原料原産地表示の義務付け拡大の推進、学校給食での高付加価値牛乳の供給拡大に加え、今年４月に宮崎県で発生、感染が拡大した口蹄疫など家畜伝染病への対応など家畜衛生対策の充実強化も盛り込んだ。

佐々木政務官に答申書を手交する鈴木部会長（右）

生乳生産は現状並みの800万ﾄﾝ 飲用需要は年１％減の404万ﾄﾝ

酪農については、10年後の32年度の生乳生産量をはじめ、生乳需要量、乳牛頭数、集送乳等経費、製造コスト、乳業工場の目標値、立地や経営条件などに応じた７つの経営指標を盛り込んだ。

生乳生産量などの現状と目標値は（表１）の通りだが、生乳生産量は現状（20年度）の795万ﾄﾝとほぼ同じ800万ﾄﾝと現実的な目標を設定した。

これに対し、飲用向け生乳需要量は現状の441万ﾄﾝに比べ37万ﾄﾝ少ない、404万ﾄﾝと予測。この飲用需要量の目標値は、１年当たり平均１％減で推移する見通しだが、ここ数年は毎年２～３％減の趨勢にあるため、今後、国と酪農乳業界挙げた飲用消費拡大が求められる。

７タイプの経営指標（表３）については、北海道（３タイプ）、都府県（３タイプ）の土地条件や経営形態、飼養形態などに応じた経営指標に加え、６次産業化の指標として、新たに家族経営でチーズを加工、販売する経営指標（１タイプ）を盛り込んだ。

10年後の家畜改良増殖目標も策定 ホル種以外の改良増殖支援掲げる

一方、新たな家畜改良増殖目標では、特色ある家畜による多様な畜産経営、消費者ニーズに応えた畜産物の供給、長期的にひっ迫基調にある穀物需給への適応を軸にした家畜作りの推進を掲げた。

このうち、乳牛については、ホルスタイン種の改良増殖目標(表２参照)だけでなく、チーズ適正の高さが特徴のブラウンスイス種、濃厚な牛乳が特徴のジャー

ジー種の改良・増殖を支援することなどを明文化した。

鈴木部会長は、「基本方針が具体化されて、酪農畜産の未来が開けるように見守っていきたい」と総括。農水大臣に代わって、答申を受けた農水省の佐々木隆博大臣政務官は、「今後の酪農畜産の振興に万全を期す。所得補償制度をはじめ、委員の意見を今後の施策の参考にしていく」と述べた。

なお、今回の答申を受け、１年以内に都道府県酪肉近代化計画と市町村の計画がそれぞれ作成される予定となっている。

（表1）新酪肉近代化基本方針の目標数値

		現状（08年度）	目標年次（20年度）
飲用向け生乳需要量		441万ﾄﾝ	404万ﾄﾝ
乳製品向け生乳需要量		345万ﾄﾝ	390万ﾄﾝ
生乳需要量合計		795万ﾄﾝ	800万ﾄﾝ
全国の生乳生産量計		795万ﾄﾝ	800万ﾄﾝ
乳牛頭数		150万頭	132万頭
乳製品工場数（生乳処理量は日量2ﾄﾝ以上）		42工場	現状の8～9割程度
飲用牛乳工場数（同）		239工場	現状の8割程度
全体工場数（同）		281工場	現状の8割程度
HACCP工場数の割合	飲用工場（同）	65%（07年度）	9割以上
	脱脂粉乳製造工場（日量20ﾄﾝ以上）	8割以上	
集送乳等経費		現状の7～9割	
原料用バター、脱脂粉乳、飲用牛乳の製造コスト		現状の8割程度	

（表2）ホルスタイン種乳雌牛の目標値（参考）・新改良増殖目標

	現状（08年度）	目標（20年度）
乳量（ｷﾛ）	8,000	8,000～9,000
乳脂肪（%）	4.0	08年度の乳成分率を引き続き維持
無脂乳固形分（%）	8.8	
乳たんぱく質（%）	3.2	
初産月齢	26ヵ月	24ヵ月

（表3）7つの酪農経営指標・新酪肉近

立地条件		北海道			都府県			全国
					寒冷地・中山間	暖地		―
土地条件		牧草地主体		畑主体	畑または水田			―
経営形態		家族		法人	家族	家族	法人	家族（チーズ加工・販売）
飼養形態	経産牛	60頭	80頭	250頭	40頭	80頭	200頭	40頭
	飼養方式	つなぎ・パイプライン		フリーストール・パーラー,哺乳ロボット	つなぎ・パイプライン		フリーストール・パーラー	つなぎ・パイプライン
	外部化	ヘルパー		公共牧場（育成牛対象）	ヘルパー	公共牧場（育成牛対象）	公共牧場（育成牛対象）	ヘルパー
	給与方式	分離給与	ＴＭＲ，エコフィード利用		分離給与 稲ＷＣＳ利用	ＴＭＲ，エコフィード，稲ＷＣＳ利用		分離給与
	放牧利用	放牧（48ﾍｸﾀｰﾙ）	―	―	―	―	―	放牧（3ﾍｸﾀｰﾙ）
ふん尿処理方式		ふん尿分離・たい肥化・液肥化		ふん尿混合・液肥化（スラリー）	ふん尿分離・たい肥化・液肥化		ふん尿混合たい肥化	ふん尿分離たい肥化・液肥化
飼料生産	作付体系	チモシー主体	混播主体	混播・トウモロコシ	混播・トウモロコシ	トウモロコシ・イタリアン		混播・トウモロコシ
	外部化	―	コントラクター・TMRセンター	―	コントラクター	コントラクター	―	コントラクター
	作付面積	64ﾍｸﾀｰﾙ	63ﾍｸﾀｰﾙ	180ﾍｸﾀｰﾙ	15ﾍｸﾀｰﾙ	12ﾍｸﾀｰﾙ	27ﾍｸﾀｰﾙ	18ﾍｸﾀｰﾙ
牛	経産牛１頭当たり乳量	8,100kg	8,500kg	9,200kg	8,400kg	8,600kg	9,300kg	8,200kg
	更新産次	5.0	4.5	4.0	4.2	4.0		5.0
土・草	10ｱｰﾙ当たり生産量	チモシー 4,600kg	混播牧草 4,100kg	混播牧草4,100kg トウモロコシ6,000kg	混播牧草4,300kg トウモロコシ5,400kg	イタリアン6,300kg トウモロコシ5,700kg	イタリアン6,300kg トウモロコシ5,700kg	混播牧草4,200kg トウモロコシ5,700kg
	経営内飼料自給率	75%	70%		45%	40%	35%	55%
	粗飼料給与率	75%	70%		50%			60%
	たい肥利用方法	経営内利用10割			経営内利用6割 経営外利用4割	経営内利用5割 経営外利用5割		経営内利用10割